# 9 月 24 日のメッセージ

聖書：テモテへの手紙　6：　1 – 12

## 「満ち足りることを知る者には」

専門学校の学生たちに「キリスト教信仰」について説明する時、いつも迷います。どのように言えば上手く伝わるか、難しいからです。ある時、「信仰とは、神を中心として生きること。どんな時も神のことを思うこと」と話しました。すると、コメントシートに「神を信じることと『推し』が尊いことは同じですか」と質問がありました。「推し」とは「特に引き立てて応援している人や物。お気に入り」(明鏡国語辞典第三版, 2020)と掲載されるほど、最近は一般化した言葉です。20 年くらい前から、女性アイドルグループ内で誰を応援するか、という意味で用いられるようになりました。しかし、今はそれ以上に意味が複雑で広いようです。「推し活」と言われる、コンサートやグッズ購入に時間も労力も厭わずにエネルギーを使うことなどは、もしかしたら信仰と似ているかもしれないと思いました。と、同時に、やはり似て非なるものとも思えたのです。

「推し」は「推し変」(対象を変えること)ができるが、神はただ一人しかおられません。

人は究極的に人を救うことができません(「神に対して、人は兄弟をも贖いえない。神に身代金を払うことはできない。」詩編 49:8)が、神はその独り子をお与えになることによって、御子の十字架と復活によって救いを実現されました(「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」ヨハネによる福音書 3:16)。

また、「推し」のためにがんばったファンに対して、舞台上から目線をくれるなどということを神はなさいません。では、人間に対して何の感情も抱いておられないのかと思えば、そうでもありません。

「貧しい者を踏みつけ／苦しむ農民を押さえつける者たち」(アモス書 8:4)に対して、「主はヤコブの誇りにかけて誓われる。『わたしは、彼らが行ったすべてのことを／いつまでも忘れない。』」(アモス書 8:4)と、誰よりも激しい思いをぶつけられます。

そう、神は人を愛しておられるのです。その愛はあまりに大きくて、神と、それ以外とどちらを選ぶのかとの究極の選択を迫るほどです(「どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」ルカによる福音書 16:13)。人間の側の選びよりも、神の選びが先行しているからこそ、神はそう問われるのでしょう。

やはり、「神を信じること」と「推しが尊い」ことはイコールではなさそうです。

加えて、人は自分の行いに対してつい見返りを求めてしまう、ということもその理由に挙げられます。そして、その自分中心の欲望は、神に対しても同様に見返りを求めるようになり、信仰を自分の利益の有無に履き違えてしまうようになります(「そこから、ねたみ、争い、中傷、邪推、絶え間ない言い争いが生じるのです。これらは、精神が腐り、真理に背を向け、信心を利得の道と考える者の間で起こるものです。」テモテへの手紙一 6:4-5)。これは神を信じる道ではありません。

では、信仰には何の意味があるのでしょう。何の「得」もないのでしょうか。パウロは決してそのようなことはないと言います。

「信心は、満ち足りることを知る者には、大きな利得の道です。」(テモテへの手紙一 6:6)

自分を中心にして「もっと、もっと」と求めるから、いつまで経っても人は満足しないのです。求めるのではなく、与えられていることに感謝する時、人は満足を覚えるようになります。その小さな満足の積み重ねがもっと大きな満足、「神がおられ、その神に愛されている世界に生かされていることへの感謝」につながっていきます。

「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実」(ルカによる福音書 16:10)なのです。

改めて神に感謝する毎日を生きて参りましょう。